

但馬アクセントについて

鎌田良二

はじめに

昭和五十六年五月國語学会公開講演で講演した「関西に於ける地方共通語化」についての要旨は次の通りである。

助動詞 ダ は但馬の言葉であるが、西播磨の ヤ が北上し、次第に但馬の ダ が ヤ に変わりつつある。地方に於いては常に近くのより文化的の中心地の言葉を真似ようとするものである。

そこで今回は、アクセントに於いても同様の変化についての調査をしようと但馬豊岡市と出石郡出石町で行った。但馬はもともと乙種アクセント（東京式アクセント）であるのが、南の神戸、姫路等播磨、東の京都の甲種アクセント（関西式アクセント）になろうとしているのではないか、特に出石での今がど

うか、を調べるものである。出石は豊岡からバスで三十分、京都寄りの所である。

一

ここでアクセントについて記す。

例えばポーランド語は常に一番最後の音節にアクセントがあると決まっている。トルコ語は常に後ろから二音節目にある、と固定している。これを固定アクセントという。これに対して日本語や英語等はその語によってアクセントが違う。これを自由アクセントという。

英語はピッチアクセント（強弱アクセント）であるが、日本

語や中国語は高低アクセントである。さらに中国語は一音節の内部に高低があるが、日本語は音節と音節の間にある。ハシ(橋)でハが高いとかシが高いとかの問題である。これを二段鏡という。さらにいうならば大正時代は三段鏡であった。例えばうれしいという場合、しよりも更にいの方が低いように感じるのである。

もっとも日本語でも固定アクセントの様なものもある。宮崎県都市では、何音節の語でも常に一番最後の音節が高くなる。ヤマのカガミとアクセントは固定している。このようなものに、下図に示したアクセントの後退の原則によるものがある。

下図について、(金田一春彦氏、昭和二十九年岩波「文学」八月号より)、先ず右側の1、2、3、4であるが、1近世京都は平家物語の京都アクセント、2新関西は現代の京都、3羽昨は石川県羽昨市、紀和は和歌山県を示す、4現代関東は現在の東京である。即ち1と2は時代的变化、2と3と4は地理的变化を示す。●は高、○は低を示す。これによると時代的即ち歴史的变化でも地理的变化でも、アクセントは一つだけ下がる法則がある。例えば●●が○○になる、●●●が○○●となる、一つ下がったということになる。これをアクセント後退の法則という。

関西アクセントから関東アクセントへの変化

例	段階			
	1	2	3	4
語例	近世京都	新関西	羽昨・紀和	現代関東
竹・置く……	●●型	○●型	○●型	○●型
音・あの……	●●型	●●型	○●型	○●型
山……	●●型	●●型	○●型	○●型
笠・書く……	○●型	○●型	○●型	○●型
雨・書け……	○●型	○●型	○●型	○●型
形・上る……	●●型	○●型	○●型	○●型
竹も・赤く……	●●型	○●型	○●型	○●型
あずき……	●●型	○●型	○●型	○●型
頭……	●●型	○●型	○●型	○●型
二十歳・音が……	●●型	○●型	○●型	○●型
山が……	●●型	○●型	○●型	○●型
兎・笠が……	○●型	○●型	○●型	○●型
野原・雨が……	○●型	○●型	○●型	○●型

現代の京都アクセントと東京アクセントとは反対である、というが、これは東京アクセントの始まりが、○●あるいは●●と続くことはないことからくるものといえる。京都の●●が

東京で一つ下がって ○○となるどころ、これが成らずに ○●となる。例えば「野原ノハラ」では、京都で ○●○。それが一つ下がつて（東に寄って）○○●となり、さらに一つ下がって東京では ○○○となるはずであるが、○○で始まらず前が高くなって ●○○となるのである。これで関西と関東のアクセントが反対のような気がするのである。

二

今回の調査は豊岡市の女子高中生九名と出石高校女子生徒二名（粟田織衣・井戸香奈子）による。（平成十一年九月八、九日実施。大阪の短期大学 神津真佐子助教授の協力を得た。しかし本学会の規定により今回は連名にしない。）女子高中生の実際のアクセントは後に記すが、結果的には先の金田一氏の様な結論は得られなかった。こくおおさっぱにいえば、出石のアクセントは現在「ゆれ」ている最中ではないか、ということである。これは「あいまいアクセント」と似ていて、東西二つのアクセントがぶつかる地方（例えば能登半島や九州北）にあるものである。ただし「あいまいアクセント」では同一人が アメだ、

と言ったりアメと言ったりする、本人がその時その時に違いを意識していないものである。「ゆれ」とは、重んじる、重んずる、また かため（固め）、かたいめと言ったりする違いである。

三

先に記した能登半島や九州北にある「あいまいアクセント」と今回の「ゆれ」とは別のものである。「あいまいアクセント」は型知覚がないのに対し「ゆれ」は型知覚がある。先に例を掲げた 重んじると、重んずる、は、時代の違いの「ゆれ」である。この「ゆれ」は時代が変わるとともに解消する。かため、と かたいめ は地域の違いの「ゆれ」である。この「ゆれ」がアクセントにも見られるのである。

今回の調査では（出石に於いて）「秋を感じる」の秋は アキである、京都アクセントでは アキ。同様に「無い」は ナイ、「有る」は アルであった。東京アクセントである。京都アクセントでは「本がある、ない」の場合 アル ナイとなるのである。これは豊岡の東京アクセントの影響である。反

対に「飴」と「雨」に於いて、東京アクセントでは「アメ」と「アメ」であるところ、アメと「アメ」であった。飴が京都アクセントである。

今は出石は但馬でありアクセントに於いても豊岡の東京アクセントであるが、京都アクセントの影響も受けている。また「ゆれ」ている状態であるが、あと十年もすれば助動詞と同様に京都アクセント（関西アクセント）が伸びてくると思われる。

— 促音について —

促音とはどんな音か。

イタ と イッタ は発音が違う。ローマ字では i t t a となり、i の次の t は口の形が無声破裂音である。実際に声は出していない。日本音声学会例会での発表では、イとタの間に一拍置いて タ を発音すれば イッタ と聞いてしまうということだ。この音はどう説明するか。塾学校では フ と プ の違いを掌に粉を置いて プ は粉が散る、フ は散らないと説明する。これと同じ様に促音をどう説明するか。

促音は中国から入ったものだが現代中国語にはなく、漢字の音にはあり、ロシア語にもある、ということだ。

促音とはどんな音か、の問いに対する説明は課題である。

参考

次の語を 普段通りに読んでください。

- ◎ 飴・牛・風・口・竹・鼻・水・着る・振る・泣く
- ◎ 石・橋・雪・足・犬・貝・髪・米・耳・山・紙・銭・雨・井戸・良い・無い
- ◎ 糸・稲・はし・書く・見る・降る・秋・空・花
- ◎ 着物・桜・柳
- ◎ 光・袋
- ◎ 朝日・命・涙・メガネ・兜
- ◎ 頭・女・鏡・菜
- ◎ うさぎ・ねずみ
- ◎ 鉛筆・散髪・流れる
- ◎ ひるめし・悲しい・正しい・詳しい
- ◎ 山々・空しい
- ◎ 大根・タンポポ・富士山
- ◎ 親指・あがるな・歩いた
- ◎ 色紙・唇・松たけ・おいしい

- ◎ 学校・かくれる
- ◎ 田舎者・泳ぎます
- ◎ 山間部・熱心や
- ◎ 山桜・泣きました
- ◎ しあささって
- ◎ お月様・赤かった・おめでとう
- ◎ 春がすみ・かくれんぼ
- ◎ 頼りない
- ◎ お正月
- ◎ 蚊・子・血
- ◎ 名・葉・日
- ◎ 絵・尾・木
- ◎ 梅・枝・顔・金・首
- ◎ 歌・音・紙・せみ・人
- ◎ 貝・皮・雲・鯛・玉
- ◎ 海・今朝・下駄
- ◎ 秋・朝・蜘蛛
- ◎ 形・氷・煙
- ◎ 間・とかげ・ふたつ・ふたり・昨夕
- ◎ 黄金・小麦・力

- ◎ 軍・思う・鉄
- ◎ 心・五つ・まくら
- ◎ からす・すずめ・高さ・広さ
- ◎ 後ろ・后・鯨・ひとつ・ひとり
- ◎ 売る・買う・開く
- ◎ 来る・出る・合う・切る
- ◎ 上げる・上がる・植える
- ◎ 生きる・起きる・落ちる・掛ける・下げる
- ◎ 少く・随す・入る・参る
- ◎ 無い・良い
- ◎ 赤い・浅い・厚い・辛い・滑い・黒い
- ◎ この・その
- ◎ あの・こう・そう
- ◎ ある・ただ・なお・まだ
- ◎ つい
- ◎ まず・もし

参考文献

日本語アクセント辞典 日本放送協会
昭和二十六年三月